

## 宮澤賢治「雨ニモマケズ」の考察

——ルソー『エミール』の影響——

加 古 美 奈 子

「雨ニモマケズ」は、宮澤賢治の死後、昭和九年に発表された。賢治は昭和八年九月に、三十八歳で病没するのだが、「雨ニモマケズ」は、昭和六年、すでに病床にあった彼が、黒表紙の手帳に九頁に渡って書き留めていたものである。したがって、賢治自身にはそれを公表する意志は無く、「雨ニモマケズ」という題も、その一連の句の冒頭の一行に因った通称に過ぎない。が、それは以後長く、宮澤賢治の代表的な「詩」として広く知られ、毀誉褒貶、様々の評価、解釈が為されてきた。

ここでは、この「詩」の、表現、発想の契機として、ルソーの「エミール」を新たに指摘したいと思う。

ルソーは改めて言うまでもなく、十八世紀のフランスの思想家である。「エミール」は、原題 *Émile ou de l'éducation* とい、一七六二年に発表されるや、禁書の要き目に遭い、ルソーの国外逃亡を余儀なくさせた問題作であった。その内容は、*Éducation* とあるとおり、教育論である。エミールという架空の生徒を設定し、幼時から成人するまで、家庭教師であるジャン・

ジャック自身が、発達段階に応じた教育を施していく、というものである。

「自然に帰れ」とは、ルソーの有名な言葉であるが、「エミール」の中でも、自然の教育ということが、全編を通じて主張されている。この自然とは、教育環境として、都会の喧騒を避け、閑静で草木豊かな田舎、田園での生活を選ぶという、環境としての自然であり、また、人を善い方向に導き成長させようとする、人間の本来の性向という意味での自然であるとも説ける。これは、当時、極度に人工化されていたフランス社会に対する反動であった。「自然信仰」とでも言うべき、「エミール」の傾向が、その痛烈な社会批判ともあいまって、キリスト教社会にあって、ルソーの受難を導いたのである。が、一方で、そうした重い社会的意義とは別に、少年エミールの成長課程には、小説的な面白さがあり、「教育小説」とも呼ばれている。

日本では、ルソーは、明治に早くも紹介されていた。現在の邦訳名「社会契約論」は、明治一〇年の服部徳の『民約論』を始め

として、明治一五年には、中江兆民の『民約譯解』その他、當時の民権運動に影響を与えた作品が次々と邦訳された。明治四五年には、石川戯庵によって翻譯された『懺悔録』が出された。現在『告白』『告白録』と言われているのがそれである。(注1)

當時の状況がうかがわれる一資料として、馬場孤蝶による「ルウソオ『懺悔録』」と題する文章の冒頭部を見てみたい。

ジャン・ジャック・ルウソオは、千七百十二年六月二十八日にスイツルのゼネヴァで生れ、千七百七十八年七月二日、巴里近くのエルムノンヴィルで死んだ。ルウソオが千七百六十二年に公にした『民約編』が、當時の世界に目覺かけて居た革命の思想に大刺激を與へて、先づ米國の獨立を促し、尋で、佛國革命の勃發の一素因となつたことや、同じ年に公にされた『エミル』といふ小説が、教育法に一新機を開くのを示し、後年の所謂ベスタロッヂの開發的教授法の基礎となつたことなどは、今更此に繰り返へす必要の無い程周知の事柄である。

#### 〔婦人公論〕大正九年一月

この記事を掲載した『婦人公論』は、島崎藤村の『新生』の合評をはじめ、『告白文学』の特集を組んでおり、ルソーが、社会思想家としてだけではなく、告白文学の先駆者としても位置づけられていたことがわかる。そして、文中にある『エミル』、すなわち『エミール』が、邦訳本の出される以前にも、ルソーその人

の名とともに、広く知られていたことが推察できる。

『近代日本文学大事典』(昭和五二年 講談社)の、「日本近代文学とルソー」の項では、『エミール』の邦訳に就いて、大正一三年の平林初之輔訳が挙げられている。が、それより前の、大正一一年には、内山賢次の抄訳、といつても、ほぼ完訳に近い形の邦訳本が出版されている。ただしこれは、BARBARA FOXLEYの英訳本『EMILE OR EDUCATION』(EVERYMAN'S LIBRARY 1911)からの重訳であり、その際、WILLIAM H. PAYNEによる英訳(抄訳)本も参照した旨が「凡例」に見える。これは、後に欠を補つて、『全譯エミール』として大正一四年に再刊された。平林初之輔の訳は、仏語の原書からの直訳で、全訳である。こちらは、『世界大思想全集』に収録され、後に岩波文庫に改訳、再録されている。以上のことをまとめると、次の様になる。

一七六二年

ÉMILE OU DE L'ÉDUCATION

ROUSSEAU, Jean, Jacques

(1712-1778)

一九〇五(明治三八)年

ROUSSEAU'S ÉMILE OR TREATISE

ON EDUCATION

(INTERNATIONAL EDUCATION SERIES)

WILLIAM H. PAYNE による英訳 抄訳

一九一(明治四四)年 EMILE OR EDUCATION

(EVERYMAN'S LIBRARY)

BARBARA FOXLEY による英訳

一九二二(大正一一)年 ルーソー原著 エミール教育論

内山賢次訳 洛陽堂

英訳からの重訳 抄訳

一九二四(大正一三)年 ジャン・ジャック・ルソー

エミール、別名教育について

(世界家庭文学名著選)

平林初之輔訳 春秋社

一九二五(大正一四)年 ルッサウ著

内山賢次訳 全譯エミール

アルス出版より再刊

一九二七(昭和二年)

エミール

(世界大思想全集10)

平林初之輔訳 春秋社

再録

一九二七(昭和二年) 平林訳(改題)岩波文庫に

一九三三(昭和八年) 昭和二年(第一篇) 昭和八年(第五篇)

(現在の岩波文庫版「エミール」は昭和元年からの今野一雄訳による)

平林訳が再録されている「世界大思想全集10」の出版社による附記には次の様にある。

當時(大正一三年)平林氏の全譯に對する賞讃の聲は文藝界、教育界、その他各方面に嵐の如く起り、重版又重版、小社も思ひがけない面目を施したのであった。

大袈裟な書き方の様だが、大正末期から昭和初期にかけて、「エミール」が特に、文学者や教育関係者に広く知られていたのは事実だろう。

さて、ここで「雨ニモマケズ」について、本稿では、特に次の部分に検討を加えてみたいと思う。

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ荳ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ、

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

(校本 宮沢賢治全集 第十二巻 筑摩書房 昭和五十年)

まず、従来の仏教からの解釈を見てみたい。「デクノボーの系譜」(注2)では、東西南北の句について、「これは八苦のうち、生・病・老・死・怨憎会苦に対する対処療法である」と説明されている。「八苦」というのは仏教用語で、生老病死の四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦を加えた八つの苦しみのことである。怨憎会苦(おんぞうえく)は恨み憎く思う人と会う苦の意である(日本国語大辞典)。賢治は法華経を信仰し、「雨ニモマケズ」の書かれた前後の手帳のページにも、法華経中の語がおびただしく記されているから、仏教との関わりは、当然考えられる。「病・老・死」と東・西・南との対応関係は、理解しやすい。だが、この場合、四苦の内の「生」に北が当たらないのが問題である。「北ニケンクワヤソシヨウガアレバ」を「怨憎会苦」とする解釈には、やや無理があるのではないだろうか。

同じ手帳中の七十一頁・七十二頁には、「土偶坊」「ワレハカウイフモノニナリタイ」等の言葉が記されており、「雨ニモマケズ」との関連が深いと思われる。その中で、「母病ム」の「母」は「子」と書かれて訂正されている。これは、「雨ニモマケズ」の方の「病氣ノ子ドモ」「ツカレタ母」とつながり、同じく七十一頁・七十二頁の方の「老人死セントス」は、「死ニサウナ人」に

対応すると思われる。しかし、ここにも、「ケンクワヤソシヨウ」に対応する語は見出せないのである。

だいたいにおいて、この東西南北の句、殊に「北ニケンクワヤソシヨウガアレバ」の箇所は特に解釈されにくい様である。農村での素朴な生活が描かれている詩中で、「ソシヨウ」といった言葉は、全体から浮いた印象を与えるのである。

次は、「エミール」の第五篇からの引用である。

彼はソフィーに會はない日には家に怠けてはゐない。彼はエミール其の人で全く變つてゐない。(中略)彼の熱心と注意とは本當に萬人に有益なもの凡てに注がれるのである。そして彼は其所に止まらない。彼は百姓を其の家に訪れ、彼等の身の上、家族、子供の數、その借地の範圍、その産物の性質、市場、彼等の權利、負擔、負債等に就いて訊き質す。(中略)一人には破れた茅葺屋根を繕はせ又は葺き更へさせる。いま一人には手不足のため荒れた土地を掃除してやる。更に他の一人には牛、馬、又は他の類の家畜を與へて失つたものを補充してやる。二人の隣人が訴訟を起さうとして居れば、彼は二人を説き伏せて仲直りをさせる。病氣になつた百姓があれば、その百姓を看護させ、自分でも親しく世話をする。金持で有力な隣人に苦しめられてゐる百姓があれば、彼はその百姓を保護してそのために口をきいてやる。若い者がお互ひに好き合つて居れば、援けて結婚させる。善良な女が愛兒を失

つたら、その女を訪ねて行き、慰めの言葉をかけて、暫くはその相手になつてやる。彼は貧者を輕蔑しない不幸な者を避けたりなどはない。

(ルッサウ著 内山賢次訳 「全譯エミール」 アルス出版  
大正十四年・大正一一年洛陽堂版とアルス出版とでは、引用箇所、大きな改訳等はない。)

「エミール」第五篇は、「ソフィー、即ち、女」と題され、前半では、女子教育について論じられ、後半では、エミールのソフィーへの求婚が語られている。エミールは二十二歳で、すでに第一篇から第四篇までで詳しく論じられて来た理想の教育を施されて、立派に成人している。その日常生活を具体的に示しているのが、右の引用部分である。

「二人の隣人が訴訟を起さうとして居れば彼は二人を説き伏せて仲直りをさせる」とある。先程から問題にしている「北ニケンクワヤソシヨウガアレバ」は、ここから発想せられたのではなからうか。

その後を見てみよう。「病氣になつた百姓があれば、その百姓を看護させ、自分でも親しく世話をする」「善良な女が愛児を失つたら、その女を訪ねて行き、慰めの言葉をかけて、暫くはその相手になつてやる」とある。「善良な女」は子を亡くしているのだから、すなわち母親である。その、母を慰め力になろうとする態度と「西ニツカレタ母アレバ」、病氣の百姓の看病と「東ニ病

氣ノコドモアレバ」の対応関係が予測される。これが、偶然の類似か否か、もう少し詳しく、その影響関係の説明を試みようと思う。

先ず「ソシヨウ」について検討してみたい。この「訴訟」という言葉は、実は、この詩の他には、賢治の作品、童話、詩ばかりでなく、書簡、手帳、ノート断片からも、その用例を見ないのである。ところが、法に訴えるいさかい、の意味では同義語の「裁判」という言葉は賢治の作品の中でも使われているのである。

ネネムは一ぺんに世界裁判長になつて

裁判の方針は

(「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」)

めんどなさいばん

そのめんだうだといふさいばんのけしき

(「どんぐりと山猫」)

などの用例が挙げられるが、いずれも童話の中で平易に用いられているのである。賢治の用語としては、「訴訟」よりも「裁判」の方がずっと自然だったと考えられる。ところが、詩中では「ソシヨウ」の方が用いられているのだから、それには何らかの根拠が考えられるのではないだろうか。「訴訟」という言葉はまさに、先の「エミール」の中に見出されている。

更に、この言葉は、同じ「エミール」の中でも、賢治が特にどの本を読んだかを絞る手がかりの一つにもなってくる。そこで、

次に、先に説明した「エミール」の英訳(注3)と平林初之輔訳の関連する箇所を引用しておく。尚、岩波文庫版の平林改訳は、問題の第五篇が、昭和八年二月の出版であり、「雨ニモマケズ」の書かれた昭和六年以後のものであるので、(注3)では除外する。

For one he has the falling thatch repaired or renewed; for another he clears a piece of land which had gone out of cultivation for lack of means; to another he gives a cow, a horse, or stock of any kind to replace a loss; two neighbours are ready to go to law, he wins them over, and makes them friends again; a peasant falls ill, he has him cared for, he looks after him himself; another is harassed by a rich and powerful neighbour, he protects him and speaks on his behalf; young people are fond of one another, he helps for ward their marriage; a good woman has lost her beloved child, he goes to see her, he speaks words of comfort and sits a while with her; he does not despise the poor, he is in no hurry to avoid the unfortunate;

(EMILE OR EDUCATION (EVERYMAN'S LIBRARY)  
BARBARA FOXLEY 1911)

甲のためには彼は落ちかゝつてゐる草莽を修繕してやつたり新規にこしらへてやつたりする。このためには資力が無いの

でうつちやられてしまつた土地を耕してやる。丙に對しては牛や、馬や、或は又損失を償ふやうな農具は何でも與へてやる。二人の隣人はともすると裁判沙汰をひき起すが、彼は彼等をあやなして再び仲直りをさせる。百姓が病氣に罹ると、彼は手當をしてやる。自分で世話もする、又金持や勢力のある隣人のために迫害されるものがあると、彼はそのものを保護し彼に代つて談じてやる。若い男女が互に戀に陥ると、彼は結婚をすゝめてやる。正直な婦人が愛する子供を失ふと、彼は彼の女に會ひに行つて、慰め、暫く彼の女と一緒に坐してゐる。

(平林初之輔訳 「エミール」 (世界大思想全集10) 春秋社 昭和二年)

賢治はフランス語を解さなかつたそうだから、原書はさておき、先に引用した内山訳の「訴訟」にあたる所が、平林訳では「裁判沙汰」内山訳の底本となつた英訳本では two neighbours are ready to go to law, の go to law というのがそれにあたる。「富士房大英和辞典」(昭和六年二月)には、law の項の二番に、「法律上の手続、訴訟、裁判」とあり、例文には、「丁度(こと)同じイデオムの To go to law があつて、「裁判に訴へる」と訳されている。先に述べた様に、賢治は「裁判」という言葉の方を普通に使つてゐた訳だから、……to go to law という英文を仮に読んでい

たとしたら、そこは、「裁判」と読み取ったと思われる。そこで、賢治が読んだのは、「訴訟」を訳語に当てている内山賢次訳ではなかったかと考えられる。

次に、「茅葺屋根」という言葉に着目してみよう。「一人には破れた茅葺屋根を繕はせ又は葺き更へさせる」と内山訳にある。

「茅葺屋根」は、百姓の家の屋根である。「雨ニモマケズ」には、「小サナ萱ブキノ小屋ニキテ」とあった。ところが平林訳では「草葺」と訳されている。英訳では、For one he has the falling thatch repaired or renewed. の thatch に当たる。これは、先の英和辞書では「草葺の住家」と訳されている。また、Compact Oxford dictionary (明治四十二年) には、Roof-covering of straw とあり、藁で覆った屋根の意で、straw の訳語として、カヤは見出だせず、藁の方が一般だった様である。つまり、「茅葺屋根」というのは、かなり内山賢次の独自の強い訳語であると考えられるのである。尚、大正一一年の洛陽堂の内山訳では、「茅葺屋根」となっているが、大正一四年のアルス出版では「茅葺屋根」となっており、誤植が訂正されている。

もう一例挙げよう。「雨ニモマケズ」の「東ニ病氣ノコドモアレバ」と内山訳の「病氣になった百姓があれば」は、内容ばかりでなく、「一の状態である一があれば」という表現も極めてよく似ている。一あれば、一ならば、という状況に続いて、それへの対処を述べる言い方であるが、特に、「一ば」という助詞を、内

山訳では多く用いていることに注目したい。そのことは、「雨ニモマケズ」の東西南北の句でも同じく言えることなのである。平林訳では、「一がーであると」という言い方を主にしている。「百姓が病氣に罹ると」とあるのがそれである。英訳では、a peasant falls ill, he has him cared for, である。ここでは、百姓が病氣になる、という主述関係の構文になっており、「一あれば」に相当する様な仮定形はとっていないのである。この部分でも、内山訳は独自の強い表現をしており、しかもそれが、「雨ニモマケズ」の表現と共通するものを持っているのである。以上のことから、「雨ニモマケズ」は、内山賢次訳の「エミール」の影響を明らかに受けていると考えられるのである。

他の箇所にも目を移していきたい。「雨ニモマケズ」には、「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ」という一節があるが、賢治は菜食主義者であったことが知られている。そのことは、「ピザテリアン大祭」、また、「フランドン農学校の豚」などの作品によくあらわれている。次に引用するのは、「フランドン農学校の豚」で、豚が殺される箇所である。

助手が大きな小刀で豚の咽喉をザクッと刺しました。

一体この物語はあんまり哀れすぎるのだ。

菜食主義は、他の生命を奪うことの問題に関わっている。そのことに関して、「エミール」第一篇には次の様に書かれている。

何うして彼の手は知覚ある生物の心臓にナイフを突きたて得

たらうか、何うして彼の眼は殺戮を眺めてゐられたらうか、何うして彼は憐れな動物が息絶ゆるまで血を流し、焼かれ、切り苛まれるのを見てゐられたらうか？

〔内村賢次訳 全譯エミール アルス出版 大正一四年／以下の引用も同様〕

ここでは詳しく検討し得ないが、「エミール」でも、動物を殺すことの残酷さが言われ、素食主義が提唱されているのである。

「雨ニモマケズ」以外にも、宮澤賢治の実践と、エミールの行動が共通する部分がある。次の引用は、最初に引用した第五篇の、「彼はエミール其の人で全く變はつてゐない」の直後の部分である。

彼は常に附近を跋涉してその博物學を調べて歩く。彼は土壌と、その産物と、その耕耘法等を觀察し、研究する。彼の目にする方法と既に熟知するものとを比較する。彼はその異ふ理由を発見しようと努める。若し他の方法がその地方の方法より勝ると思へば、彼はそれを百姓に示して注意を求める。優れた類の勤を勧めれば、自分で圖を畫いて見本を作らせる。石灰坑を見つければ、石灰を土に用ひる術を百姓に教へるが、之れは彼等に珍しいことである。彼は往々自ら手を貸す。百姓は彼が自分たちよりもつと樂々と凡ゆる道具を使用するのを見て吃驚する。

「博物學」に関して、賢治の作品には、非常に多くの鉱物名、

植物名、地層、化石の記述などが出てくる。賢治自身、博物學の知識がとても豊かであつたことが知られている。引用には「博物學を調べて歩く」とあるが、同じく「エミール」第五篇には、

博物學に興味を有つて居る人で、地面を調べて見ずに通り過ぎ、岩を缺いて見ずに通り過ぎ、山を植物に氣を付けずに、また岩石の傍を化石を捜さずに通り過ぎたりするものがあるだらうか？

と「博物學に興味を有つて居る人」の行動が具体的に語られている。「岩を缺いて見ずに通り過ぎ」ることができようか、などというところからは、「頭を出している石で賢治に（ハンマーで）たたかれたことのないものはなからう」（注5）という逸話を残すくらい賢治が石の収集に熱心だつたことが思い出されるのである。

もう一ヶ所、賢治の姿と重なるところがある。大正一五年頃から、賢治は肥料設計などをはじめ、近隣の百姓に農業指導を行なつた。先程の引用にあるとおり、エミールもまた、「百姓を指導し、自分も畑を耕している。更に、エミールの「石灰を土に用ひる術を百姓に教へるが、之れは彼等に珍しいことである」というところは、科学肥料の使用法を農民に教えた賢治を髣髴とさせるのである。

以上のことに關しては、具体的な検討の余地を多く残しているが、ここでは、その影響關係の可能性の指摘に止める。また、こ



これらの、素食主義、博物学、農業指導といったこと総てに、この『エミール』の影響があったなどは、決して思わない。ただ、花巻農学校の教師でもあった賢治が、このルソーの教育論を、大きな共感を持って読んだであろうことは想像に難くない。

昭和六年、病気の為に実践を退かざるを得なかった賢治が、床中であつて、エミールの健康な理想生活を想起しつつ、それを、「サウイフモノニ ワタシハ ナリタイ」と、自身の理想や願ひにひきつけて、「雨ニモマケズ」という一連の詩句を手帳の上に書き留めたのではなかっただろうか。

## 注

1 「ルソー」 桑原武夫編 一九六二年 岩波新書

2 一九八三年 山内修氏

3 大正十一年、洛陽堂版の凡例に内山賢次が、

あらゆる手を盡くして他の (Foley 訳以外の) 譯を搜したが、  
International Education Series 中の William H. Payne の抄譯しか  
手に入りませんでした。

と書いているから、一般には、他の英訳は入手困難であつたと考えられる。

4 ジュニア文学名作選「風の又三郎」解説 一九七二年 ポプラ社  
(岡山大学文学部三年)